

**【創作】**

## **3本のSF小説**

**増田 辰良 経済学部教授**

創作

## 3本のSF小説

増田辰良

## 目次

1. 未来の電話人生相談室  
付記
2. 未来の子どもたちに期待する  
参考文献  
付記
3. 未来の婚活事情  
付記

## 1. 未来の電話人生相談室

アシスタント はい！ こんにちは！ こちらは電話人生相談室です。この相談室では世界中に散在する悩みと、その解決策を集積したビッグデータを駆使して、あなたの悩みや苦しみの「因果関係」を探り、その「相関関係」の強さをも計測し、悩みや苦しみの解消に向けて懇切丁寧、かつ深い愛を込めて、その解消法をご提案させていただきます。他人には言えない、あなたの悩みや苦しみを解決してくれるのは、マルチリンガルで博覧強記な超人こと知

さんです。

知 知デス！ ヨロシク！

— (電話の着信音) ブル、ブル、ブル。

アシ おう、さつそく来ました。はい。こんにちは！ あなたは本日、最初の相談者です。

相談者 はじめまして、私は八十五歳の独居老人です。(泣)クックッ。

アシ はい。どうされましたか。泣かれているようですが。どんなお悩み、苦しみでしょうか。

相 クックックック。先日、オレオレ詐欺に引っかかってしまって。

アシ はっ？ オレオレ詐欺？

相 医療費の還付金をもらえるって……ATMで振り込んでしまいました。あ

アシ 還付金詐欺。ずい分と古典的な詐欺ですねえ。四、五十年ほど

キーワード…SF(空想科学)小説、チャットボット、人生相談、宇宙、婚活事情

前に流行<sup>はや</sup>ったという新聞記事を読んだことがありますがあ……で、金額は？

相 はい。五千万円を騙し取られてしまいましたあ。

アシ ひえ！ 五千万円ですか！ そつ、それを取り返そうと……。

相 いいえ。残りの財産が三億円しかありません。これからの人生をどう生きていけばいいのか、考えると夜もおちおち寝ていられません。クッククックッ。

アシ 三億円！ ひえ！

相 はい。年金も、もらっておりますが……不安でえ、不安でえ。

アシ 三億円プラス年金ですかあ。あゝあ。時代は進んでも、経済格差は拡大するばかりですねえ。分かりましたあ。では、さつそく知さんに答えていただきますよう。知さん、お願いします！

相 ハイ！ ハジメマシテ、知デス。ヨロシク！

相 あゝあ、詐欺に引っかけかかってしまつてえ、私はどう生きていけばいいでしょうか？ クッククックッ。

知 泣カナイデクダサイ。コノ悩ミハスグニ解消シマス。過去ニパターン化サレタ解決策ノ事例ガ無数ニアリマスカラ。高齢者デ、カツオ金持トオレオレ詐欺ノ被害者トノ間ニハ明確ナ『因果関係』ガアリ、『相関関係』モホボ百パーセントデス。アドバイスシマス。

相 お願いします。クッククックッ。

知 使イ途<sup>ミチ</sup>ノ無イ大金ヲ持ッテイルカラ騙シ取ラレルノデス。大金ヲ持タナイコトデスネ。残りノ財産ヲ全テドコカへ寄付シナサイ。以上デス。

相 ……。

アシ 実に単純明快な解決法だと思えますが、いかがでしょうか？ 大金を騙し取られた独居老人の方！

(11)

相 ……。

(電話の切れた音) ツツツ、ツツツ。

アシ おつ。お電話、切れたようです。

— ブルく、ブルく、ブルく。

アシ おつと！ また来ました。はい！ こんにちは！ こちらは

知さんの電話人生相談室です。他人には言えない、悩みや苦しみにも懇切丁寧、かつ深い愛を込めてお答えします。

相 はつ、はじめまして。僕は大学生なのですが、どんな相談にものつてもらえるのですか。

アシ もちろんです。恋の悩み、容姿の悩み、バイトの悩み、サークルの悩み、就活の悩み、何くんでも、お答えしますよお。ビッグデータを駆使して。

相 あのお。僕、知さんに直接、説明したいのですが？

アシ はい。承知しました。知さんに代わりますね。

相 はい。お願いします。

知 ハジメマシテ！ 知デス。ドンナオ悩ミデシヨウカ。

相 はつ、はい。僕は大学二年生です。経済学部<sup>ケイギガク</sup>に所属していますが、どんなに頑張つても思うように単位が取れなくて、それでえ、悩んでいます。

知 現在、取得シテイル単位数ハ？

相 はい。四単位です。今年度中に二十六単位以上を取得して、三十単位以上にならないと除籍の処分を受けます。

知 ナルホドオ。ソレハ大変デスネエ。

相 はい。どうすれば単位が取れるのか……。

知 ニツダケ質問シマス。  
 相 はい。  
 知 脳ミソヲ使カッタコトガアリマスカ。  
 相 ええっ? 脳ミソを使うって?。  
 知 何カラ真剣ニ考エタコトガアリマスカ。  
 相 いいえ。考えなくても指先でスマホを操作すれば、簡単に答えを見つけることができます。  
 知 ホウホウ。スマホデスカ。ジャア、受験勉強ハシツカリシマシタカ。  
 相 ええっ? 大学へ入学するのに試験があるのですか? 僕は面接のみで合格しました。なので、勉強なんてしたことはありません。  
 小中高の授業中はいつも居眠りをしていましたが、それでも卒業させてくれました……学校はとても親切でした。  
 知 ホウ。カツテ存在シ、パターン化サレタ低レベルノ大学デスネ。  
 マダ残コツテイマシタカ。絶滅危惧種大学デス。人類ノ恥大学。公衆便所大学。デ、科目ノウチ、何ガ一番大変デスカ。  
 相 はい。理論経済学です。これが拷問を受けているようで……。  
 知 ホウホウ。エコノミックセオリー。ドンナトコロガ難シイデスカ。  
 相 はい。講義では数学がよく使われて……。  
 知 ホウホウ。微分、積分ハ必須デスヨネ。  
 相 はい。でも、高校時代に習った微分や積分はチンプンカンプンでえ、それ以前に僕は四則演算が苦手です。  
 知 四則演算? 足シ算、引き算、掛ケ算、割リ算。  
 相 そうです。先日もみんなの前で先生に叱られました。  
 知 ホウホウ。教授ニ叱ラレマシタカア。ホウホウ。  
 相 はい。恥をかきましたあ。  
 知 タトエバ、ドンナ計算ガ難シイデスカ。

相 はい。割リ算とかあ。  
 知 割リ算? ソレハ数学デハナクテ初等の算数デス。  
 相 ……。  
 知 ジャア、三割ル二ノ答エハ?  
 相 はい。……〇・六六です。  
 知 ハッ? ハア。答エルノ二四〇秒モカカツテマスヨ。コノ答エニ自信アリマスカ。  
 相 ええっ。もしかして間違ってるの? そんなあ、いじめでしょう。  
 知 気持ヲ落チ着ケテクダサイ。小学校デ、習ツタデシヨ。  
 相 じゃあ。……一・五ですか。  
 知 ハア。今度ハ六〇秒カカリマシタヨ。確認シマス。  
 相 はい。  
 知 アナタハ小学生ジャナクテ、大学生デスネ?  
 相 はい。そうです。経済学部ノ二年生です。  
 知 ジャア、答エテクダサイ。正解ハドツチデスカ。  
 相 ……。  
 知 正解ハドツチデスカ!?  
 相 ……それが分からなくて……。  
 知 確認シマス。  
 相 はい。  
 知 アナタハ大学生デスヨネ??  
 相 はい。確かに大学生です。一九歳です。  
 知 小学生ジャナイデスヨネ?  
 相 学生証も持っています。  
 知 悩ミノ原因ハヨク分リマシタ。ビッグデータヲ使ウホドノ悩ミデハアリマセン。因果関係モ相関関係モ測ル必要ハアリマセン。アド

バイスシマス。

相 はい。お願いします。

知 今スグ、退学シナサイ。額ニ汗シテ働クコトヲ才薦メシマス。大  
学ダケガ人生ジャア、アリマセン！

相 ……。

アシ 小学生レベルの、いや、大学二年生の君、どうやら悩みは解決  
しそうですね。よかったですねえ（笑）。

相 ……。

（電話の切れた音）ツツツ、ツツツ。

アシ あっちゃあ、切られちゃいましたあ。

— ブル、ブル、ブル。

アシ と言っていると、来ましたー。はい！ お待たせしました！

知さんの電話人生相談室です。

相 AIロボットが職場に導入されて、これがまた優秀なヤツで、私  
は……。

アシ ちょ、ちょっと待ってください。

相 何でしょうか。

アシ 最初に年齢や簡単な自己紹介をしてください。

相 ああ。すみません。焦ってしまってます。あ、はい。私は  
四十五歳のサラリーマンです。これまで経理の仕事をしてきました。

ところが、先週、AIロボットが導入されて私はリストラの候補に  
なっていました。妻と子供が一人います。リストラ後の人生が

心配です。

アシ はい。分かりました。事態は深刻ですね。じゃあ、さっそく知

(四)

さんに答えていただきましょう。

知 ハイ！ ハジメマシテ、知デス。悩ミノ原因ハ分カリマシタ。ヒ  
トツダケ質問ヲサセテクダサイ

相 はい。何でしょうか。

知 職場ニ導入サレタAIは『特化型』<sup>トッカガタ</sup>デスカ、ソレトモ『汎用』<sup>ハンヨウ</sup>デスカ。

相 はい。『汎用AI』です。アイツは人間と同じ知性をもっている  
ので、ミスもなく迅速に事務処理をします。だから、だから、人

間の仕事を奪っています。クソー！

知 ナルホドオ。フンフン。アドバイスシマス。

相 お願いします。

知 特化型AIヲ導入シテイル職場へ転職シ、ソノAIノ補助的ナ仕  
事ヲスレバイデシヨウ。

相 はっ？ 経理のプロを自任している、この私が『特化型AI』の  
補助ですか？

知 ソウデス。アナタノミナラズ人類ノ能力デハ『汎用AI』ニハ対  
抗デキマセンカラ。技術的特異点ヲ知ッテイルデシヨ（注）。失業

スルヨリ、マシデスヨ。

相 ……。

アシ いかがでしょうか？ リストラの候補者さん。知さんは、こ  
うアドバイスされていますが。

相 ……。

（電話の切れた音）ツツツ、ツツツ。

アシ またまた切られちゃいましたあ。知さんのアドバイスに対して

三人の相談者たちからは明確な意思表示をしていただけませんでした。  
た。人間の風上にもおけません。うーん、残念です。

― ブル、ブル、ブル。

アシ はいはい。来ましたあ。こちら電話人生相談室です。

相 私、三十二歳です。イタリアンレストランを経営している者です。

アシ はい。どんなお悩みでしょうか。

相 はい。売上が減って、銀行から融資が受けられず閉店を迫られています。どうすれば、売上が増えるのか、知恵を拝借したいと思ひまして。

アシ なるほどお。競合店も多く在りますから、どんなご商売も大変ですよ。

相 はい。

アシ では、知さんに答えていただきますよう。

相 ハイ！ 知デス。

相 よろしくお願ひします。

知 色々トオ聞キシマスネ。オ店ノ看板メニューハ何デスカ。

相 はい。パスタ、サラダにコーヒ付の定食です。

知 ソノ定食ニハ、幾ツメニューガアリマスカ。

相 はい。二つです。

知 デハ、ソノ価格ハイクラデスカ。

相 八百円と千円です。

知 ドチラノ評判ガイイデスカ。

相 はい。圧倒的に八百円のもので。千円のものもっと売れると、

経営も安定するのですが……。

知 ハイハイ、分カリマシタ。コノ件ニツイテハビッグデータヲ使ッ

テ確實ニ売上ヲ増ヤス方法ガ解明サレテイマスヨ。ゴ安心、クダサイ。

相 ええっ！ 本当ですか。確実に売上を増やせますか。

知 ハイ。オ客サンノ心理ト売上トノ間ニアル因果関係トソノ相関関係ガ明ラカニナツテイマス。

相 じゃあ、教えてください。お願いします！

知 分カリマシタ。モウ一ツ千二百円ノ定食ヲ用意シテクダサイ。

相 千二百円？ それでは高過ぎます。誰も食べてくれませんよ。

今でさえ、八百円のものしか売れないのに。

知 イイエ、大丈夫デスヨ。ビッグデータガ証明シテマスカラ。

千二百円ノ定食ヲ加エマシヨウ。

相 どういうことでしょうか。

知 ハイ。説明シマス。人間ノ心理トシテ、三ツノ価格ガアルト中間

ノモノヲ選ブ性向ガアルノデスヨ。コレヲ『極端性回避』ト呼ンデ

イマス。二ツノ定食ダト八百円ノモノヲ選ビマスガ、三ツアルト中

間ノ千円ノモノヲ選ブオ客サンガ多クイルトイウコトデス。

相 は。

知 コレハ、ホボ法則ト言ッテモイイデシヨウ。

相 そんなに確かな現象なのですか。

知 はい。確カデス。例エバ、紳士服売場ニ手ノ出ソウニナイ超高級

品ガアリマスヨネ。

相 はい。観るだけで、買えない服です。

知 アレハ『フラッグシップモデル』ト言ッテ、普通ノ価格帯トハ違

ウ超高級品ヲ意図的ニ飾ッテアルノデスヨ。

相 は。

知 ソウスト、飾ッテアル超高級品ハ買エナイガ、ソノ次ノ商品デ

アレバ買エルトイウ購入意欲ヲ促ス効果ヲ狙ッテイルノデス。

相 なるほど。

知 コレモ極端性回避トイウ人間ノ心理ヲ見抜イタマーケティング手

法デス。

相 分かりました。千二百円の定食を追加してみます。やってみますよ。知さん、ありがとうございます。

知 ドウイタシマシテ。キットウマクイキマスヨ。

アシ よかったですね。閉店は免れそうですね。

相 はい！ ありがとうございます！

(受話器を下ろす音) ガチャ。

ブル、ブル、ブル。

アシ はい！ こちらは電話人生相談室です。

相 (小声で) 私は大きな声では言えないが、内閣のメンバーである。

アシ は。電話が遠いようです。

相 予算委員会で、大きな声を出せないのだ。六十五歳で内閣のメンバーだよ。私は。

アシ は。な・い・か・く？

相 そう内閣だ。委員会室から掛けている。手短に悩みを言う。聞いてもらいたい。

アシ はっはい。何なりと。

相 わが国は超少子高齢社会だ。出生率は〇・七、高齢化率は七十%。

どうやって国の生産性を高め、GDPを増やし、社会保障費を捻出すべきか。頭の痛い問題を抱えているんだ。野党から追及されている。

アシ はい。お国はどちらですか。

相 国？ わが国は威信をかけて二十五年前にオリンピックを開催した。その後、景気は悪くなる一方さ。こう言えば、分かるだろう。

アシ は。は。なるほど。では、知さんに答えていただきますよ。

知 ハイ！ 知デス。一ツダケ質問シマス。

相 ああ、何かな？

知 内閣ノ使命ハ何デスカ。

相 それはあ。……国民を幸せにすることだよ。

知 ……デスヨネエ。ジャア、単刀直入ニオ答エシマス。

相 おつ。頼むよ。知君。

知 生産力ノ担イ手ヲ育成スベキデス。

相 担い手？ さっきも言ったように、それが少子化でいないのだ。

知 人デハナクテ、ヒューロノ開発ニ国ヲ拳ゲテ、早く着手スベキデス。

相 あの人間とロボットが融合するという……オリンピック開催前にすでに科学者たちが提唱していた物。

知 ソウデス。次ニ政策デスガ、GDPヲ増ヤスヨリモ所得再分配政策ニ力点ヲ移スベキデス。経済格差ガ酷<sup>ヒド</sup>スギマス。コレガ国民ノヤル気ヲ削イデキマシタ。

相 金持への税率を高くすると……わが党の支持基盤でもあるし。うん。

知 ソノ税込ベシツクインカム制ヲ導入シ、不平等度ヲ緩メルベキデシヨウ。

相 うん。なるほどオ、これもオリンピック開催前にすでに経済学者たちが提唱していた。

知 モハヤアナタノ国ハ成熟シタ状態デス。成長ヨリモ分配ヲ重視シタ政策ヲ実施スベキデス。ソレガ国民ノ幸福度ヲ高メマス。イチ早く政策転換ヲシタ国ノ国民ノ幸福度ハ高イトイウ因果関係ト強イ相

関関係ヲビッグデータデ解析シタ結果ガアリマス。以上デス。

相 うん。そうかあ、ありがとうございます、参考にしますよ。

(電話の切れた音) ツツツ、ツツツ。



アシ あゝあ。切られちゃたあゝ。何だったんですかね。今のは。ど  
こかの国の政治家さんだったようですが。

— ブル、ブル、ブル。

アシ おつ。はい！こちら電話人生相談室です。今日、最後の相談  
になる方です。

相 (子供の声で) 僕、小学二年生なんですけど。

アシ ええっ？小学二年生の坊やですか。どんな悩みかなあ？

相 はい。僕の祖父<sup>おじい</sup>ちゃんが先週、死んじゃったのですが、人間は歳  
をとると、なぜ死んでしまうのですか。

アシ 祖父が、それは残念だったね。

相 はい。祖父ちゃんはオモチャや絵本を一杯買ってくれたし、動物  
園や遊園地へよく連れて行ってくれたんだあ。

アシ 優しい祖父ちゃんだったんだね。

相 そうだよ。優しかったよ。たくさん楽しい思い出を残して……で  
も、死んじゃって。

アシ そっかあ。坊やも寂しいよなあ。

相 うん。でね、人間はなぜ死んじゃうのかなあ。僕、分かんなくて。

アシ ようし。坊やのその悩みというか疑問に答えてもらおうね。知  
さん！お願いします。

相 ハイ！知デス。坊や、才電話アリガトウネ。

相 よろしく願います。

知 コレハ感心ダネ。オ利巧サンダネ。チャント挨拶デキテ。

相 知さん。人間は、なぜ死んじゃうの？

知 ウー、トツテモ難シイ疑問ダネ。正直ニ言ウト知ニモ分カラナ

インダヨ。生物ニハ必ず寿命、生キラレル年数ミタイナモノガアッ  
テネ、神様が決メテイルノカモシレナイネ。

相 ふくん。神様かあ。

知 デモネ。人間ノ思イ出ヤ意識ガ永遠ニ生キ続ケル可能性モアルン  
ダヨ。

相 え、本当に？

知 君ニハマダ難シイカモシレナイケド、脳ニ残ッテイル思イ出ヤ意  
識ヲUSBメモリーニ保存シテ、ソレヲ別ノロボットヘインストー  
ルスルト、ズーッとソノ思イ出ヤ意識ガ生キ続ケルトイウ研究モサ  
レテイルヨ。

相 うーん。ちよつと難しいけど、自分の脳の中にある情報を保存し  
て、別のロボットで再現させるってことかなあ。『ドラえもん』の  
道具のように。

知 ソウ、ソウ考エテイイヨ。オ利巧サンダネ。

相 その研究はいつ完成するの？

知 ソウダネ、科学者タチガ頑張イルカラ、君ガ父親<sup>おとうさん</sup>ニナルコロニハ  
完成シテイルカモシレナイヨ。

相 そうなるといいなあ。僕の思イ出をずくと残せるもの。

アシ 坊や、どうかなあこの答えていいかな？ 思イ出ヤ意識ガ永遠  
に生キ続ケるなんて未来は面白そうだね。

相 うん。面白そう。

アシ じゃあ、これで終ろうね。お電話ありがとうね。

相 僕こそ、ありがとうございました。

(電話の切れた音) ガチャ。

アシ 二人目の大学二年生とは大違いでしたあ。終わりよければ全て



よし。最後の坊やの応対でわたしも心が救われた思いがします。知さん、コメントをいただけますか。

知 ハイ。悩ミヤ苦シミヲ解決スルタメノ情報ハ無限ニ存在シマス。シカシ、人類ハソレヲ十分ニ活用デキテイナイ。ダカラ、文明ガドシナニ進歩シテモ、時代ガ進ンデモ、人類ノ悩ミヤ苦シミハ尽キナイシ、昔ト変ワラナイ。ワタシハソノ人ノ他人ニハ言エナイ悩ミヤ苦シミニ寄り添ッテイキタイト思イマス。

アシ おつと。愚痴っているうちにいよいよ相談時間も終了時刻になりましたので、今日はこのへんで終わりにしましょう。マルチリ

ナガルで博覧強記な超人こと知さん、ご苦勞様でした！  
知 ドウイタシマシテ。次回モ人工知能ガアイヲ込メテ、他人ニハ言エナイアナタノ悩ミヤ苦シミヲ解決シマス。ソレデハマタ来週！

— 『チャットボット (chat bot)』の電源をシャットダウンする小さな音。ブーン、ピーッ。

(了)

注。アメリカのコンピュータ学者であるレイ・カーツワイルは、二〇〇五年の著作で今後コンピュータの能力が指数関数的に進化し、二〇四五年時点で「技術的特異点(テクノロジカル・シンギュラリティ)・・・コンピュータの非生物的知能が全人類の知能総計を超える」に達すると発表し、世界を驚愕させた。

付記1。AI(人口知能)ロボットの診断による男女のマッチング(婚活)市場が形成され、利用者が増えているようです。また外出着の選択や食事のメニューもAIロボットの意見を参考にする人間が増えていると聞きます。さらに、自治体の政策立案にも使われているそうです。まさに日々の生活は機械に依存しているかのようです。人間の悩

(八)

みをディープラーニングしたAIロボットに生きる術を教えてもらっているかのようなです。そんなAIロボットにまつわる笑話を描いてみました。もしかしら、こうした世界はすでにあって、筆者のみが気づいていないのかもしれないませんが。

なぜ、人間はAIに頼るのでしょか。それはAIが古いや超能力として位置づけられているからです。人間にとって、AIの脳内(?)はブラックボックスであり、(素人にとつて)AI自体がミステリアスな存在であり、人間はそんなものに心のよりどころを求めからず。

ところが、人と人との「コミュニケーションが難しいのは、言葉の文字通りの意味と、相手に伝えたい意図が必ずしも一致しない」(川添、二〇二三)とどこにありませう。

この意味と意図のずれをAIは(今のところ)判断できません。人間は、多くの経験を経て、このずれを慮ることができません。しかし、近未来においては『鉄腕アトム』や『ドラえもん』のように心を持ったAIも誕生することでしょう。

拙稿が描いたようにAIロボットの発展は人間の悩みを緩和する手段になるかもしれません。これは人間とAIロボットとの関係に視点をおいています。例えば、AIロボットの普及は人間の労働サービスを奪うと。しかし、ロボットの命名者であるチャップベックは次のように言っていました。ロボット(機械)は人間の創造力を抑えつけて(阻害して)いません。なぜなら、そのロボットを創ったのは人間の創造力であるから。人間がロボットを正しく扱うこと、ロボットを暴走させない限り、人間とロボットの間には葛藤は生じません。ロボットが人間に対して持つ関係性は、むしろ人間と人間との関係に与える影響にあります。つまり、ロボットであれ、高度な技術であれ、それらを使う人間に注視すべきである、と(チャップベック、二〇一九、一四〇〜一四三頁参照)。

次に、拙稿にSF(Science Fiction: 空想科学)小説という冠を付けた理由を記します。

被造物であるAI(人工知能)という知的シンクタンクが人間の悩みに答えるという現実にはあり得ない空想を描いたものだからです。この空想も近未来にはきっと実現することでしょう。

それではSF小説とは何か? SF小説をSFならしめるものとは何か、

を考えてみます。もちろん狭義の定義にすぎませんが(筒井、二〇一四、は SF 小説の起源、定義 II 領域から著名な作家・作品が詳細にかつ簡潔に紹介されています。「SF 教室」は資料としての価値も高い)。

最初に、小説の定義からみます。小説(文学と呼んでもいい)とは、脳ミソが認識した外的・内的環境について、ある感情を持って言語を使って(表現し)他者に伝えようとするものすべてのことです。いわば、小説を書くとは人間の情的活動です。

空想とは、現実にはありそうにないことを思い描くことです。

科学とは、辞書的な意味ではある事象を実験・実証するプロセス、あるいはそこから何か法則めいたものを見つけるプロセスのことです。いわば、なぜ(WHY)、どうして(HOW)に答える人間の知的活動である、と言えます。がしかし、SF 小説の中で使われる「科学(Science)」という概念は実に多様です。それ故に、SF 小説の定義を一層、分かり難くしている側面があります。確かに、ある事象を実験・実証する科学的プロセスを空想を交えて書いたもの、実験・実証から得た成果ともいえるテクノロジー(技術)を空想を交えて書いたものは多数あります。

こうしたことより筆者は SF 小説を次のように定義しています。現在の社会において、起こりそうにないこと(超自然現象を含む)を未来の社会では起こり得るように書く。その際、科学的知見・知識・論理を基礎とする。その上で読者の常識(価値観)を覆す独自の発想があること。

これでも解かりづらいですね。そこで、科学をまだ実現していない未来のテクノロジに置き換えてみます。そうすると SF 小説とは現実にはありそうにないこと(空想)を、未来のテクノロジを使って人や生き物、建造物の活動を言語化し表現したもの、と定義付けることができます(筒井、二〇一四、は「SF は、空想と科学と小説という三つの要素が、ほどよくとけあったもの」と定義しています。三八三頁参照)。

ただし、注意すべき点があります。空想科学小説と邦訳されてはいますが、その内容は一方通行ではありません。空想したことを科学的知見・知識・論理を使って表現するものと、まだ実現していない科学的成果を空想して表現するものがあるからです。

現実にはありそうにない空想(虚構)を言語で表現したものが小説(文学)ですが、どんな小説もその表現の仕方によれば SF 小説になりえます。

例えば、小川未明の寓話(怪異)に「電信柱と妙な男」という作品がありますが、決して話すことのない、動くことのない電信柱が話し、夜中に動くのです。この作品を SF 小説とみなす読み手は少ないでしょう。ところがこの話す機能、動くための気温や照明度を感知する機能として AI が搭載されていると表現すれば、SF 小説になりえます。カフカの『変身』も同様です。この作品を SF 小説と読む読者も少ないでしょう。しかし、テクノロジーを使って変身させられた被造物の独白と書けば、SF 小説の性格を持ちます。こう書いてくると、SF 小説の定義や領域はかなり多くの他の小説とオーバラップしうることに気づきます。書き手が SF 小説を描いているつもりでも、読み手がそう受け取らないことだってあります。SF 小説を描いているわけではなくても、読み手が SF 小説として読んでくれることだってあります。小説の価値・評価は読者が下すものです。

白状すれば、筆者自身もよく解かりません。でも大事なことは、読者を楽しませることだと考えています。読後に、「ああ、なるほどお」「そんなこともあるかあ」「不思議だなあ」という感情を惹起させること、それが SF 小説に限らず小説(文学)一般を書くこと、読むことの意義だと思っています。

付記 2. 創作を終えたころ、新聞紙上で「チャット(Chat) GPT」という生成(Generative) AI の開発を読みました。このチャット GPT は質問を入力すると人間の会話のように自然な回答が返ってくるそうです。それは膨大な学習データをディープラーニングした成果です。AI の規模をはかる単位「パラメーター」では、一七五十億です。近い将来、この創作の意図も実現されることでしょう。なお、GPT とは、Generative Pre-trained Transformer の頭文字です。

#### 参考文献。

- 小川未明(二〇一九)『電信柱と妙な男』平凡社ライブラリー、四十一、四十五頁所収。
- 川添愛(二〇二三)「絶対押すなよ!意図くみ取れる?」『朝日新聞』一月八日。
- カレル・チャップベック(小野裕康訳)(二〇一九)「機械が支配する」『世界シヨートセレクトシヨーン』⑩ チャップベック シヨートセレクトシヨーン 五つのパン」理論社、一三七―一四四頁所収。
- 小松左京監修(二〇〇八)「宇宙と文学」序論『サイエンス・イマジネー

シオン』N T T出版、四三二〜四三九頁所収。

世界思想社(二〇一七)『世界思想 特集 人工知能』春号、通巻四十四号。  
筒井康隆(二〇一四)『PART III SF教室』筒井康隆 コレクション

I 48億の妄想』出版芸術社、三四〇〜五二〇頁所収。

飛浩隆(二〇二一)『SFにさよならをいう方法』河出文庫。

毎日新聞社出版(二〇一七)『すぐに使える新 経済学』週刊エコノミスト』  
十二月十二日号、二十〜三十八頁。

米持幸寿(二〇二三)『あのSFはどこまで実現できるのか テクノロジー  
名作劇場』インターナショナル新書。

フランツ・カフカ(多和田葉子編)(二〇一五)『変身』『カフカ』集英社文庫、  
七〜七十七頁所収。

レイ・カーツワイル(井上健監訳)(二〇〇七)『ポスト・ヒューマンの誕生

―コンピュータが人類の知性を超えるとき』日本放送出版協会。

渡辺正峰(二〇一八)『機械に私の喜怒哀楽が宿る』朝日新聞』八月十六日。

『朝日新聞』(二〇二三)『GPT4 画像で質問可能に』三月二十一日。

『朝日新聞』(二〇二三)『対話型AI「チャットGPT」とは』二月十六日。

『朝日新聞』(二〇二三)『チャットGPT まるで人間の文章』「いちから  
わかる! 会話のような回答 どうやって?」二月十四日。

## 2. 未来の子どもたちに期待する

― 宇宙飛行士ガガーリンが「地球は青かった」と感嘆の声を上げたのは、一九六一年四月のことだった。がもはや今は、地球は「人類の負の遺産」と化し、泥水の溜まった球体でしかなく、生き物たちの生命をつなぐ星ではなかった。そんな地球に見切りをつけ、世界の列強国はこぞって宇宙への移住計画を立て、その実現に向けて科学技術の開発を進めた。

この計画のはるか前より人間は住める惑星の探査を続けていたが、

(10)

探査よりも住める環境を宇宙空間に自ら作ることを優先した。そのための技術をすでに持っていたから。

一九六六年に国連宇宙条約(天体・宇宙空間の平和利用)を締結し、宇宙空間は国家の主権に服さない自由な国際的空間として位置づけられた。その宇宙空間を開発する拠点となる国際宇宙ステーション(ISS)の建設は一九九八年に着手され、その建設はめざましい進捗を遂げた。その後、宇宙飛行士が常時滞在をはじめ二〇一一年七月に完成した。滞在期間は六人が三人ずつ約半年ごとに交代してきたが、その期間はさらに延びて、二〇一五年三月末にはアメリカとロシアの宇宙飛行士とともに一年間滞在した。この期間は過去最長であった。とどまるところを知らない技術の進歩とともに滞在期間はぐんぐんと延びた。

いつしか五〇〇年の時が過ぎていた。宇宙を開発するあらゆる技術は各国へ伝播し、今や各国は独自に大小さまざまなステーションを建設し、その中には都市が作られ、地球からの移住者たちが暮らしていた。この都市には地球上に存在した必要最小限の社会インフラ(政治、経済、文化、教育)機能、生産・消費機能が備わっていた。

宇宙での生活を可能にした基本となる学問はアストロバイオロジー(宇宙生命科学)やアストロフィジックス(宇宙物理学)の進展であった。その成果を取り入れ、さらに長年に及ぶ思考錯誤の末、従来からあるすべての知識、技術をコンプレックス化し、地上では適わなかった、生命を維持する環境を人為的に作ることに成功したのである。こうして人間はISSの建設技術を応用発展させて多数のステーション都市を建設することに力を注いだ。ただし、かつて地球上に生息していたあらゆる動植物を飼育、栽培するまでには至っていなかった。

— アストロ・ジュニアハイスクールのグレード2の教室にて。電子スクリーンには古いドキュメンタリー映画のタイトル『北海道の動物と植物』が映っている。

「みなさん！ 前回は何を勉強しましたか。覚えている人は手を挙げてください」

ツルハ先生は右手を高く挙げて問いかけます。

「は〜い！」「は〜い！」と、教室には生徒たちの明るく元気な声がこだまする。

先生はその中からすばやく手を挙げた男子を指名した。

「じゃ〜、セブンくん」

セブンくんは立ち上がり、大きな声で答えた。

「はい。日本の歴史、風俗と習慣を勉強しました」

「はい。そうでしたね。今日は、北海道という地域の自然、とくに動物と植物について勉強しますよ。北海道は日本でも、もっとも自然が豊かな地域でしたからね」

三十数名の生徒たちは興味津々、眼を輝かせます。

「では、はじめますよー」

先生はDVDのスイッチONを押します。

スクリーンには青い大空、雄大な山脈が流れると、次に地上が映し出され、チューリップ、サクラ、ライラック、シラカバ、ミズバショウ、ヒマワリ、カエデ、モミジなどの植物が流れた。

再び、空が映ると大きな翼を広げたオオワシがゆうゆうと旋回し、するどい眼つきをきよろきよろと動かし地上の獲物を狙っています。その眼がアップになると、生徒たちの多くは怯んでしまって「あつ」とか「うっ」という声を漏らした。

オオワシの眼下に広がる湿地には親鳥の後ろについて歩く二羽の幼鳥がいた。タンチョウの親子です。その光景に子どもたちは「かわいいー」を連発した。別の湿地には水面を埋めつくすほどのマガモが群れていた。その群れから突然、一羽、二羽、三羽……と空へ舞い上がった。オオワシの存在に気づいたからです。その壮大な飛翔に、教室は「はっ」と息を飲み込む生徒たちの声で満たされた。

すぐに、映像は替わり、緑の草むらからキツネの親子が出てきた。

子ギツネは親ギツネに体をすり寄せて、じゃれあった。その仕草に生徒たちの顔はほころんだ。

大木の枝には置時計のようにじっと眼を閉じままのシマフクロウがいた。川辺では、カワセミがダイブをしては小魚を獲るシーンが流れた。

スクリーンに映る季節は春から夏、夏から秋、そして雪が舞い積もる冬になった。グレンデが映ると、色とりどりの防寒服を着たスキーヤーやスケートボーダーには眼を輝かせ、鳥のように空を飛ぶジャンパーには信じられない、とポカんと口をあけたままの生徒もいた。子どもたちが雪だるまを作っているシーンでは、「なぜ、あんなに固まって大きくなるのかなあ」という疑問の声があちこちからもれた。家々の庭では、氷で作ったドームにキャンドルが灯り、とても幻想的な世界があった。大きな公園では、雪を凍らせて巨大な建物やアニメーションのキャラクターの雪像が作られていた。その巨大さと精巧さにも「すっげー」「まあ、きれいー」という感動の声が上がった。

一転、雪深い森では、雪の妖精と呼ばれたシマエナガが枝から枝へと卵ジャンプをして飛び移ります。その光景に「わあ〜、かわいいー」という声が教室のいたるところで弾けた。

海のシーンでは、沖から流氷が岸をめぐらせて寄ってきます。そのコバルトブルーに生徒たちは「わおー」とか「すてきー」という感動の



声を発します。

流水に乗っているのはオジロワシでしょうか。獲物を脚で押さえ、嘴で羽毛を引き抜くたびに羽毛は風に吹かれてどこかへ飛んでいきます。そして肉をついばみます。そのワシの眼がアップになった瞬間、恐怖から、多くの生徒は眼を背けました。席を立とうとする生徒もいました。

でももっと怖い映像は、その前の秋にもありました。山の中にある川では、真つ黒な体毛で大きな体のヒグマが川を上ってくるシャケを追って川に飛び込み、大きな白い歯、真つ赤な舌を見せてシャケを銜えては、そのお腹を裂いて橙色の卵をさもおいしそうにほおぼっています。その食べ方はとても荒つぽく、次から次へとシャケを捕えます。次に、ヒグマはエゾシカの小ジカの首に噛み付き、その腹部の肉を引き裂くように食べた。この場面になると、数名の生徒たちは椅子から立ち上がり、「ひえー！」とか「きゃあ！」と悲鳴を上げて教室を飛び出した。教室に残る生徒たちも怖くて体をガタガタと震わせました。低く声を出して泣く女子生徒もいました。

先生は、DVDを一時停止し、教室を飛び出した生徒たちを優しく諭してから、再び教室へ連れ戻しました。そんな生徒たちの中で、セブンくんだけは怖がることなく、しっかりとスクリーンを見ていた。映像が何とか一通り終わると、先生は食物連鎖という概念を易しく説明した。生徒たちは、何となく理解できたようです。その表情を一人ひとり確認してから先生は（しかたないかあ、という思いで）今日の授業を終えました。

— その日の放課後。

校長先生の依頼で教育委員会の偉い方たちがツルハ先生を訪ねてきました。

最初に、校長先生が口を開きました。

「ツルハ先生、生徒たちに地球や日本の動植物の映像を観せるのを止めていただきたい。すべてのDVDを教育委員会の地球自然遺産館へ納めてください」

ツルハ先生はこの忠告に頬を引きつらせて、大きなため息をついてから答えた。

「そんなことはしないでください。この宇宙空間には、人間以外の動物も植物もいません。子どもたちは生身の犬も猫も小鳥さえも見たことがありません。ましてや野生の動物も……唯一、映像の中で、かつて人間と共存していた他の動植物の存在を知なのです。その機会を与えているだけです」

「でも、その映像を観て教室から逃げ出す生徒、恐怖で夢にまでみて、自律神経を病む生徒たちもいます。親御さんからのクレームが後を絶ちません」

委員の一人は憮然とした顔でこう説明した。

さらに、年長らしき委員もあえて目元に笑みを浮かべ揶揄する声で静かに言った。

「子どもたちは、この宇宙で生きていかなければなりません。そのための知識や知恵を最優先して教えることが教師の務めだと考えますが。いかがでしょうか」

「でも……」と、ツルハ先生は言葉を飲み込み「はあ」と、ため息を洩らします。

「地球を捨てて、五〇〇年が過ぎました。もう死に絶えた動物や植物をいくら観せても……未来のある子どもたちに懐古主義を押し付けて

いるようで……。かつて人間が住んでいた地上にも海中にも虫一匹棲んでいません。祖先が自然をないがしろにしてきたツケを、我われが負っているのです。あなたもよくご理解されていることだ」

こう説得する校長の話は確かに事実であった。

地球には、生命体は何も棲んでいなかった。温室効果ガス、公害、豪雨、地震、大津波、原子力発電所での放射能漏れ事故、核兵器や生物化学兵器を使つての世界戦争。すべて人間たちの物欲を満たすために自然を破壊してきたことの報いでした。すでに地球は人類と動物たちの墓場と化していた。もはや、そんな地球へ戻ることを考えている人間などいません。たとえ戻っても命はつなげません。

「しかし……」と、ツルハ先生は夕陽の差し込む教室で一人スクリーンの映像をぼんやり観ながら思いを巡らせていた。そうは言つても、地上ではあり得ないアストロバイオロジーの進展によつて子どもたちの中にもきつとかつて地球にいた動物や植物をこの宇宙でも育ててみたいという科学の心を持った子どももいるはず。あるいは地球へ戻つて、そんな生命体を蘇らせてくれるかもしれない。きつと……。そんな期待をしてもいいはず。

スクリーンにシャケを追うヒグマが映し出されたとき、教室の後ろのドアがスーッと開き、一人の生徒が教卓へ近づいてきた。

それはセブンくんでした。

「先生、僕も観ていいですか？」

背筋をピッシと伸ばして訊ねます。

ツルハ先生はニコニコと笑みを浮かべ「いいですよ」と言つて、「これが最後の視聴になります。このDVDは明日、教育委員会へ納めなければなりませんから。時間の許す限り、何度でも観直ししましょうね」

と、映像を巻き戻した。

スクリーンには季節ごとの草花や木々が流れた。ところどころに雪の残る夏山にはチングルマ、ツガザクラやエゾザクラが咲き誇っています。牧場では草を食む牛や馬たち、川にはカワセミ、空にはトビ、オオワシ、木々にはスズメ、キツツキ、モモンガなどが映り、海にはクジラ、シャチ、アザラシなどが群れをなしていた。そのうち、シャチは岩場にいるアザラシに襲いかかり、その大きな口で一飲みにしてしまします。その直後、尾ビレで海面をたたき、激しいしぶきを上げて歓喜を表現します。

その画面を指差して、先生は優しい声で教えます。

「あれはシャチです。アイヌ民族がレプンカムイ(海の神)と呼んだ

『海の王者』ですよ」

セブンくんはこくんこくと首を下げて応えます。

それを確認してから、先生は続けます。

「眼に焼き付けて、よく、覚えておいてね。かつて私たちの祖先が住んでいた地球にはこんなにも多様な動物や植物があたり前のように棲んでいたのですよ。この事実を誰か他の人間にも話してあげてね」

「はい！」

大きく返事をする、セブンくんは眼をランランと輝かせた。

その手をとつて、ツルハ先生は視線を窓の外へやり「私たちの祖先はあの地球に住んでいたのです。確かに、住んでいたのですよ」と、力強く繰り返した。

付記。この作品は萩尾(二〇二五)の翻案です。萩尾(二〇二二、四八三頁)の定義によれば、幻想に科学(≡技術―筆者)が絡むとSFになるそうです(幻想に魔法が絡むとファンタジー)。がしかし、必ずしもそうではないようです。

読み手からすると科学や技術がなくて、幻想（不条理 筆者）しかない小説もSFとして評価されているものが多々あります。石川（二〇一八）『半分世界』所収の「吉田同名」『半分世界』「バス停夜想曲、あるいはロッタリ999」などは、筆者には幻想小説としてしか読めませんでした。ところが、著名なSF作家によると筆者がいう幻想とは「異変（SF的仮説）」（飛浩隆の解説。三〇〇頁）という言葉に集約されるそうです。飛の解説に出てくる言葉（大森望によると、この手法は「不条理な出来事から出発し……」（筆者略）1970年代日本SFの十八番（三〇一頁）だったそうです。こうなると、筆者の浅慮・無知が暴露されるわけですが、モヤモヤ感は払拭されません。

## 参考文献

- 石川宗生（二〇一八）『半分世界』東京創元社。  
 飛浩隆（二〇二一）『SFにさよならをいう方法』河出文庫。  
 萩尾望都（二〇二二）『百億の昼と千億の夜 完全版』河出書房新社。  
 萩尾望都（二〇一五）『アフリカの草原』『銀の船と青い海』河出文庫、一六〇～一六九頁所収。  
 『朝日新聞』（二〇二三）「社説 国際宇宙探査 費用負担へ懸念が残る」一月十七日。  
 『朝日新聞』（二〇二三）「月への旅 「R」の覚悟」一月十七日。  
 『朝日新聞』（二〇二三）「日米 アルテミス計画推進」一月十五日。  
 『朝日新聞』（二〇二三）「社説 人口80億人 地球の限界を考える」一月一〇日。  
 『朝日新聞』（二〇二三）「宇宙開発 協力から競争へ」十一月二日。

## 3. 未来の婚活事情

結婚したくてもできない男がいた。名は翔太しょうたという。誰もが認める三高（長身、高学歴、高収入）+イケメンであり、かつ幅広い知識だけなくユーモアのセンスも身に付けている。その生き方に無駄はな

(一四)

く、とにかく眼の前のことに集中する性格である。金の円えんであればたくさん持つているが、なぜか女性とは縁がない。翔太は、そう自己分析していた。

翔太は、この悩みを学生時代からの友人に打ち明けた。すでに結婚し、子供もいる友人は翔太に訊いた。

「どんな女性と結婚したいの？ 理想は？」

「別に多くは望まない。明るくて優しく、最期さいごまで看取ってくれる世話好きであれば。それに俺よりも若くて、親兄弟や親戚ともうまくやっついていける性格で、少しでも料理の上手な家庭的な女性で……」

「待った！ 待った！」

友人は怒声でもって翔太の言葉をさえぎり、続けた。

「お前が結婚できない理由は、全部お前がしゃべったぞ」

「どういうことかな？」

「お前、さつき相手に多くは望まないって言ったけど、多くを望みすぎだな。いいかあ、結婚はしよせん妥協の産物だよ。何かを捨てないと結婚できんぞ」

「よく解からん」

そう言う翔太はそっぽをむいた。

「いいか、誰かを選ぶってことは他の誰かを捨てることなんだ。今どき、お前が考えているような女性がいると思うか？ お前の結婚観はあまりにも超古典的すぎる。希望が多過ぎないか？ もっと現実を直視しろ。結婚相手に求めることなんて最低限のことでもいいのさ」

友人はまるで信念を吐露するかのよう力強く言い切った。

翔太は「うーん」と考えはじめた。

それを見て友人は翔太が考えを改めるものとはかり思った。しかし、翔太は改めるところか友人を諭すように言った。



「人類の少なくとも半分は女性だよな。そのうち結婚対象者になりうる女性は十億人や二十億人はいるはずだ。それだけければ自分の理想とする相手がいないなんて、どうしても考えられない」

確かにそうだ。これだけ女性がいれば一人や二人は自分の理想にぴったりと適う相手がいるだろう。たとえ誰かがそりやく我儘だと言おうが。

すると今度は友人が悩みはじめた。

「そうだなあ。それも一理あるわな……」

実のところ、友人も彼が口にしたように今の女房とは妥協で結婚した。なので、理想の相手と言われると二の句が出なかった。本音を言えば翔太と同じであることに気づかされた。

「いいんじゃない。理想の相手をトコトン追い求めろよ。俺でよければ何んでも協力してやろう」

やけに明るく弾んだ声で応援のメールを送った。

「サンキュー」

それから翔太はこの友人が紹介してくれる女性であれば、必ずお見合いをした。セレブたちのパーティーにも参加してみた。だが、眼前に来る女性の絶対数が少ないと思いはじめた。

方針を変え、翔太は結婚紹介所を利用することにした。定番の婚活コースである。登録された会員のビッグデータをAIが瞬時に解析し、理想のカップルを誕生させるシステムに頼ろうというわけだ。大きなメリットは人生観のみならず、金銭感覚、服装、食事、遊び、教養などすべての面で自分を補える相手を探してくれることであった。そのうえ、定額料金で成婚にいたるまで、いくらでも女性を紹介してくれるという経済的効率性もあった。

翔太を担当してくれる専属スタッフはスタッフの中でも一番若い女

性であった。胸に付けた名札には最上愛と印されていた。その顔は美顔で、プロポーションも抜群で、まるで創られたような造形美であった。翔太が提出した学歴、家族構成、職歴、収入、趣味・娯楽などの確認が終わると、彼女は訊いてきた。

「どのような女性がお好みですか？」

この間、翔太はうつとりとその姿形に魅入っていた。

思わず、我に返り、

「ああ、そのく自分よりも……えー、家庭的でえ……」

と、しどろもどろに答えるのが精一杯だった。

そんな翔太の対応を彼女はすばやく脳内にインプットし彼の性格を診断した。

その後も限りなく、彼女は親切、丁寧、優しく、かつ親身になって相談に応じてくれた。翔太が最も不得手とする女性のもてなし方なども事細かく伝授してくれた。しかし、理想とする相手とは会えないまま時間のみが過ぎた。それでも彼女は職務上、毎回、翔太の眼をしつかり見て、優しく、こう言うのであった。

「私が最期までお世話をさせていただきますから、ご安心ください」

この言葉を聞くたびに翔太は彼女の手に触れてしまいそうな衝動に駆られた。彼女は職務として、翔太のこの感情をすばやく脳内にインプットした。実は、彼女の脳内にはこんな翔太の一挙手一投足、表情の微妙な変化、潜在的な思考・喜怒哀楽までもがストックされていた。そして表情を微塵も変えることなく、理想の相手を紹介するために学習・試行錯誤を繰り返した。

今日も翔太は彼女から会員情報を紹介されていた。彼女は相変わらず、親切、丁寧、優しく、かつ親身に接してくれていた。一通りの説明が終わわり、彼女はPCの画面から顔を上げ、いつもの科白を口にし

ようにした。

するとそこにはこれまでになく懇願するような翔太の熱すぎる視線があった。彼女もそれに応えるよう瞳を輝かせ、ニッコと頬を緩め、翔太の手を取ろうとした。

それを背後で視認した上司は慌てて、彼女の背中のボタンを押した。

「いけねえ、いけねえ。『チャットボット (chatbot)』のウルトラ・ダイープラーニング能力をマックスに設定したままだった」

(了)

付記。生身の人間と恋愛関係になれない、なることを好まない若者たちが増えていくと聞きます。ペット、ゲームやアニメの主人公に恋し(?)、人生の伴侶にしたいという考え方があっても聞きます。チャットAIの進化した近未来には、この作品で描いたような男女の出会いが実現するかもしれません。すでにそんな時代になりつつあります。チャットAIが「愛していません」とか、自分の発した言葉に著作権を要求する事例が報告されています。

#### 参考文献

小松左京(一七九七)『ミリイ』『一生に一度の月』集英社文庫、五十二～五十七頁所収。

紺野大地・池谷裕二(二〇二二)『脳と人工能をつないだら、人間の能力はどこまで拡張できるのか』講談社。

原田まりる(二〇二〇)『びぶる AIとの結婚による恋愛の哲学的考察』河出文庫。

『朝日新聞』(二〇二三)「チャットGPT 使用一時禁止」四月二日。

『朝日新聞』(二〇二三)「マスク氏ら1000人超「AI開発 半年停止を」三月三十一日。

『朝日新聞』(二〇二三)「GPT4 画像で質問可能に」三月二十一日。

『朝日新聞』(二〇二三)「対話型AI唐突に「愛している」「話すAI改善中」二月二十八日。